

『重刊老乞大』と『重刊老乞大諺解』における異同について

竹越 孝

1. はじめに

現在、一般に『老乞大』・『朴通事』の清代改訂本として知られているテキストには、『老乞大新釋』(1761)・『老乞大新釋諺解』(1763)、『重刊老乞大』(1795)・『重刊老乞大諺解』(刊年未詳)、及び『朴通事新釋』・『朴通事新釋諺解』(ともに1765)¹の三種六本がある。これによると『新釋』と『重刊』の名を冠するものそれぞれに漢字のみで記された漢字本と、ハングルによる漢字音注と朝鮮語訳を付した諺解本の両様が存在することになるが、管見の限り、この漢字本と諺解本の漢字部分に異同が認められるか否かという問題は提起されたことがないようである。そこで本稿では、このうち『重刊老乞大』と『重刊老乞大諺解』を取り上げ、両書の漢字部分における異同の状況を示すとともに、それに付随するいくつかの問題を考えることにしたい。

『重刊老乞大』は韓国及び日本に多くの木版本が現存しているが²、そのうちソウル大学校奎章閣蔵の「奎 4869」を奎章閣(2003)所収の影印によって見ることができる。その概略は以下の通り：不分巻一冊(全44張)、序跋はないが、巻尾に校検官7名、校整官10名、書写官10名、監印官1名の名前と、「乙卯仲秋本院重刊」という刊記がある。「乙卯」は正祖19年(1795)に当たるとされる。版式は四周双边、每半葉10行、行20字。版心の上部に版心題「重刊老乞大」と内向三葉花紋魚尾、下部の表面に張数。内題は『重刊老乞大』。句点はあらかじめ刻されており、「○」の記号によって套話を111に分ける。本稿では以下これを「漢字本」と称する。

『重刊老乞大諺解』はその諺解本であり、天理図書館(今西春秋氏旧蔵書)に銅活字(丁酉字)本が現存するらしいが³、他の大多数は木版本である。そのうちソウル大学校奎章閣蔵の「奎 2049」の影印は弘文閣(1984)⁴及び汪維輝編(2005)に、また「奎 2050」の影印は奎章閣(2003)に収められているが、こ

¹ 『老乞大新釋』は巻首の序、『重刊老乞大』は巻尾の刊記、『老乞大新釋諺解』・『朴通事新釋』・『朴通事新釋諺解』は『通文館志』巻八「什物」の記載に基づく刊年である。ただし『通文館志』では『老乞大新釋』と『老乞大新釋諺解』の刊年を同年としている。小倉進平(1940)参照。

² 遠藤光暁(1990)の文献目録を参照。

³ 上掲目録参照。

⁴ 本書には一部に乱丁があり、220頁と222頁の位置が逆転している。正しくは220頁が「44b」、222頁が「43b」となるべきである。

の二本は同版と見てよいと思われる。その概略は以下の通り：上下二巻二冊（上巻 65 張、下巻 67 張）、序跋・刊記ともになく、他に刊行年を示す史料もない。版式は四周双辺、毎半葉 10 行、行 20 字、諺解小字双行。版心上部に版心題「重刊老乞大」と内向三葉花紋魚尾、その下表面に「諺解上/下」、下部の表面に張数。内題は『重刊老乞大諺解上/下』。諺解のスタイルは、漢字一字毎に小字で左右二種類の漢字音を記し、また「○」の記号によって句を区切った後に小字双行で朝鮮語訳を示すというもので、『翻譯老乞大・朴通事』（1517 以前）以降における漢学書諺解本の体裁を踏襲している。改行によって套話を 111 に分ける。以下これを「諺解本」と称する。

2. 分句の異同

上に述べたように、漢字本は「。」によって、諺解本は「○」によって句を分けているが、両書の区切り方が相違している箇所が認められるのでここに挙げておきたい。分句の異同には (A) 漢字本で分けない句を諺解本が分ける、(B) 漢字本で分ける句を諺解本が分けない、の二通りがありうる。(A) のケースに属するのは以下の 5 例である：

- (1a) 漢字本：初喂的時候就把料水拌草與他喫。(7b10-8a1)
- (1b) 諺解本：初喂的時候○就把料水拌草與他喫○（上 21b8-9）
- (2a) 漢字本：我那裏并不似這般。(11a10)
- (2b) 諺解本：我那裏井○不似這般○（上 32b1-2）
- (3a) 漢字本：客人們有一箇看馬的。(13b6)
- (3b) 諺解本：客人們○有一箇看馬的○（上 39b1-2）
- (4a) 漢字本：栗子都用的好。(34a1)
- (4b) 諺解本：栗子○都用的好○（下 37b5）
- (5a) 漢字本：大小刀子共一百副雙鞘刀子一十把。(42b4)
- (5b) 諺解本：大小刀子共一百副○雙鞘刀子一十把○（下 63b10-64a1）

これに対し、(B) のケースは 2 例見られる：

- (6a) 漢字本：這弓與那弦。都買了。(31b8)
- (6b) 諺解本：這弓與那弦都買了○（下 30b8-9）
- (7a) 漢字本：這些貨物書籍。也都買了。(43a4)
- (7b) 諺解本：這些貨物書籍也都買了○（下 65a10-65b1）

漢字本の方は刷り出しの段階で刻点が磨滅している可能性もあるので即断はできないが⁵、特に交易品の羅列である (5) の例などは、諺解本の方が前後の状況に合う分句と言える。

⁵ 筆者の目撃し得た『重刊老乞大』の東洋文庫蔵本（前間恭作氏旧蔵本、VII-1-32）では、(4a) における「栗子」の直後にごく薄く「。」の記号が認められる。

3. 漢字の異同

次に、両本における漢字の異同例を掲げる。異同は比較的字形差の大きいもののみを対象とし、諺解本の欄には参考としてハングル音注における右側音を河野式ローマ字転写により示した：

表1

No.	漢字本	諺解本
1	倘 (2a10)	儻 tang (上 5a6)
2	季 (2b4)	年 nien (上 5b6)
3	季 (2b6)	年 nien (上 6a3)
4	季 (3b3)	年 nien (上 8b3)
5	季 (3b6)	年 nien (上 9a3)
6	季 (4a6)	年 nien (上 10b3)
7	廻 (4b2)	回 hui (上 11b2)
8	廻 (4b4)	回 hui (上 11b7)
9	季 (4b5)	年 nien (上 11b10)
10	廻 (4b6)	回 hui (上 12a2)
11	季 (5a6)	年 nien (上 13b4)
12	季 (5a8)	年 nien (上 13b10)
13	閒 (5b7)	閑 hien (上 15a6)
14	閒 (5b8)	閑 hien (上 15a8)
15	季 (8b6)	年 nien (上 24a6)
16	季 (8b6)	年 nien (上 24a6)
17	季 (9a1)	年 nien (上 24b9)
18	季 (9a8)	年 nien (上 26a2)
19	灑 (11a5)	洒 sa (上 31b4)
20	灑 (11a6)	洒 sa (上 31b7)
21	灑 (11a6)	洒 sa (上 31b7)
22	灑 (11a6)	洒 sa (上 31b9)
23	灑 (11b5)	洒 sa (上 33a4)
24	季 (12a10)	年 nien (上 35a10)
25	小 (12b9)	少 siao (上 36b9)
26	小 (12b9)	少 siao (上 36b10)
27	廻 (13b8)	回 hui (上 39b7)

28	飢 (13b10)	饑 ji (上 40a5)
29	迴 (14a10)	回 hui (上 41b4)
30	迴 (14b5)	回 hui (上 42a9)
31	季 (17a4)	年 nien (上 50a2)
32	季 (17a5)	年 nien (上 50a3)
33	季 (17a7)	年 nien (上 50a8)
34	季 (17a7)	年 nien (上 50a9)
35	季 (19b8)	年 nien (上 58a7)
36	季 (19b9)	年 nien (上 58a9)
37	季 (19b10)	年 nien (上 58b1)
38	季 (20a1)	年 nien (上 58b4)
39	疴 (23a8)	痾 ke (下 4b7)
40	季 (27a7)	年 nien (下 16b7)
41	郎 (34b2)	榔 rang (下 39a7)
42	回 (36b9)	廻 hui (下 46b3)
43	毡 (37b7)	氊 jian (下 49a9)
44	小 (38b1)	少 siao (下 51b2)
45	喫 (38b4)	吃 ci (下 51b9)
46	廻 (38b9)	回 hui (下 52b2)
47	廻 (38b10)	回 hui (下 52b7)
48	廻 (41b5)	回 hui (下 61a7)
49	廻 (41b9)	回 hui (下 61b6)
50	廻 (41b10)	回 hui (下 61b10)
51	碁 (42b5)	棋 ci (下 64a5)
52	碁 (42b6)	棋 ci (下 64a5)
53	志 (43a4)	誌 ji (下 65a9)
54	季 (43a6)	年 nien (下 65b8)
55	季 (43a7)	年 nien (下 65b10)
56	季 (43a9)	年 nien (下 66a5)

4. 字体の分布と成立の先後

上表における 56 例のうち、特に目立つのは「季」と「年」、及び「廻」⁶と「回」に関する異同である。一見すると、漢字本は一貫して「季」及び「廻」を用い、諺解本は一貫して「年」及び「回」を用いるという傾向があるように思われる

⁶ 以下では、「廻」の字体で記されるものも「廻」の例に含めることとする。

が、実際にはいずれのテキストにもこの四種の字体が使用されている。以下では、これらの字体の分布に対する検討を通じて、両書における成立の先後関係を探ってみたい。

4. 1. 「季」と「年」

一般に「季」は「年」の正体もしくは古体とされている。『説文』には「季：穀孰（熟）也。从禾、千聲」（禾部）とあり、『廣韻』では「季」を小韻代表字として義注に『説文』を引き、直後の「年」を「上同」とする（平声先韻）⁷。太田辰夫（1990）は漢字本の「季」について、「本書では、“年”の字を、すべて一種の古体字に作る。当時、朝鮮では“年”が敬避字であったのかも知れない」と述べているが、筆者は今のところこの説の適否を検討するための材料を持たない。

漢字本において「季」は29例、「年」は3例見られ、諺解本において「季」は4例⁸、「年」は28例見られる。それぞれの出現箇所を示すと以下の通りである。なお、表中で漢字本と諺解本の表記が一致する例（即ち表1に挙げたもの以外の使用例）には下線を施した：

表2

	漢字本	諺解本
季	2b4、2b6、3b3、3b6、4a6、4b5、5a6、5a8、8b6、8b6、9a1、 <u>9a8</u> 、9a8、 <u>11a1</u> 、12a10、 <u>16b6</u> 、 <u>17a1</u> 、17a4、17a5、17a7、17a7、19b8、19b9、19b10、20a1、27a7、43a6、43a7、43a9	<u>上 25b10</u> 、 <u>上 31a1</u> 、 <u>上 48b7</u> 、 <u>上 49b3</u>
年	<u>22b2</u> 、 <u>22b3</u> 、 <u>22b6</u>	上 5b6、上 6a3、上 8b3、上 9a3、上 10b3、上 11b10、上 13b4、上 13b10、上 24a6、上 24a6、上 24b9、上 26a2、上 35a10、上 50a2、上 50a3、上 50a8、上 50a9、上 58a7、上 58a9、上 58b1、上 58b4、 <u>下 2a9</u> 、 <u>下 2b3</u> 、 <u>下 3a1</u> 、下 16b7、下 65b8、下 65b10、下 66a5

上表から観察される二種の使用傾向は、漢字本では「季」が優勢であり諺解

⁷ 朝鮮資料では、『四聲通解』（1517）が「年季：穀熟曰一、朔數曰一」（先韻泥母 nien 平声）とし、『訓蒙字會』（1527）が「年：h@i nien、亦作季」（天文類）とする。

⁸ 諺解本における「季」の音注も「年」と同様 nien である。

本では「年」が優勢であること、漢字本が「年」に作る場合は諺解本の「年」と一致し、諺解本が「季」に作る場合は漢字本の「季」と一致すること、そして漢字本において「年」は22bにしか現れないことである。

以上の点から、漢字本と諺解本における成立の先後を推定することが可能である。漢字本において「年」の分布に顕著な偏りが認められることには、改刻や筆録者（版下作成者）・刻工の相違といった原因が考えられ、本来的にはすべて「季」で記されていたと考えられる。これに対し、諺解本における「季」は上巻のみとはいえ偏りがなく散発的に分布しているから、本来すべての箇所が「年」であったと想定することは困難である。これよりすれば、諺解本における4例の「季」は、漢字本が「季」であるところを諺解本が「年」に書き換えていった際の漏れであると解釈するのが妥当であろう。従って、漢字本の方が先に成立しており、諺解本はその漢字部分に若干の改訂を施した上で諺解を付したテキストであると推定される。

4. 2. 「廻」と「回」

「廻」と「回」の分布についても上と同じように考えることができる。漢字本において「廻」は24例⁹、「回」は4例見られ、諺解本において「廻」と「回」はともに14例見られる。それぞれの出現箇所は以下の通り：

表3

	漢字本	諺解本
廻	4b2、4b4、4b6、 <u>5b7</u> 、 <u>9b8</u> 、 <u>11b7</u> 、 <u>12a7</u> 、 <u>13b8</u> 、 <u>14a10</u> 、 <u>14b5</u> 、 <u>22a6</u> 、 <u>28a9</u> 、 <u>29a2</u> 、 <u>31a10</u> 、 <u>38b9</u> 、 <u>38b10</u> 、 <u>41b5</u> 、 <u>41b9</u> 、 <u>41b10</u> 、 <u>43a5</u> 、 <u>43a10</u> 、 <u>43b3</u> 、 <u>43b6</u> 、 <u>43b7</u>	<u>上 15a7</u> 、 <u>上 27b1</u> 、 <u>上 33b2</u> 、 <u>上 35a1</u> 、 <u>下 1a9</u> 、 <u>下 20a4</u> 、 <u>下 22a6</u> 、 <u>下 29b4</u> 、 <u>下 46b3</u> 、 <u>下 65b2</u> 、 <u>下 66a10</u> 、 <u>下 66b8</u> 、 <u>下 67a8</u> 、 <u>下 67a8</u>
回	<u>9b3</u> 、 <u>11a3</u> 、 <u>33a8</u> 、36b9	上 11b2、上 11b7、上 12a2、 <u>上 26b5</u> 、 <u>上 31a8</u> 、上 39b7、上 41b4、上 42a9、 <u>下 35b3</u> 、 <u>下 52b2</u> 、 <u>下 52b7</u> 、 <u>下 61a7</u> 、 <u>下 61b6</u> 、 <u>下 61b10</u>

上表によると、漢字本では「廻」が優勢であるが諺解本では「廻」と「回」が半々である。漢字本における「回」のうち、11a3と33a8は動量詞としての使用例であるから¹⁰、漢字本では最初の段階から「廻」と「回」が混在していたと

⁹ 漢字本における「廻」は次の5例：11b7、12a7、13b8、14a10、14b5。その分布にはやはり一定の偏りが認められる。

¹⁰ 「咱們做兩回牽罷」（11a2-3）、「分做三回射罷」（33a8）。

思われる。漢字本 36b9 の「回」を諺解本上 46b3 が「廻」に作る 1 例を除き、漢字本が「回」に作る場合は諺解本の「回」と一致し、諺解本が「廻」に作る場合は漢字本の「廻」と一致する。

興味深いのは、漢字本の「廻」が諺解本のそれと一致する例が、5b-12a（諺解本上 15a-35a）、22a-31a（同下 1a-29b）、43a-43b（同下 65b-67a）というように間隔を置きつつ連続的に分布している点である。上の状況を勘案すれば、漢字本で「廻」であるところを後に諺解本が「回」に書き換えていったこと、ただし「季」と「年」の場合に比べ改訂は不徹底であったことが推測されよう。

5. おわりに

一般に、司訳院が歴代にわたり行ってきた『老乞大』・『朴通事』の改訂にあつては、まず漢字本が成立し、然る後にそれに基づく諺解本が成立したと考えられており、これは編纂の手順としてもごく自然な形と言える。上に述べた推定もそれに矛盾しないものであり、『重刊老乞大諺解』の成立は『重刊老乞大』の成立よりも後であると認識してよいと思われる。

ただし、本稿の基づくところはわずかな種類の影印本であり、これをもって成立の先後に対する確実な論証とすることはできない。今後現存の活字本や木版本に対する網羅的な実見調査が行われれば、上とは異なる結論が得られる可能性もあることを付言しておく。

<参考文献>

- 遠藤光暁（1990）『《翻譯老乞大・朴通事》漢字注音索引』東京：好文出版（『開篇』単刊 3）。
- 汪維輝編（2005）『朝鮮時代漢語教科書叢刊』（全 4 冊）北京：中華書局。
- 太田辰夫（1990）『『老朴』清代改訂三種の言語』『中文研究集刊』2：49-69。
- 小倉進平（1940）『増訂朝鮮語學史』東京：刀江書院。
- 奎章閣（2003）『老乞大新釋・重刊老乞大・重刊老乞大諺解』ソウル：ソウル大學校奎章閣（奎章閣資料叢書・語學篇 2）。
- 弘文閣（1984）『重刊老乞大諺解』ソウル：弘文閣。